

# 今後の被服構成に関する一考察

武内昌子・奥平志づ江

## 1. はじめに

毎日何気なく身につけている衣服。その素材、製造過程を考えて着装する人は少ないであろう。多種多様の衣服が豊富に出廻っている現在、被服製作に時間をかける必要があるのかと誰もが考えるのではないだろうか。しかし、家政科の教科に被服構成があるのは何故か、学生達の被服構成に対する考え方を把握すべく下記調査を行い、その結果をまとめ今後の参考としたい。〈表-1〉

表1 履修者一覧表

年 度	在 籍 数	履修者(%)
昭和 58年	90	66
59年	90	81
60年	150	49
61年	200	50
62年	203	47
63年	202	46
平成 1年	210	45
2年	206	35

## 2. 調査方法と内容

調査は、本学短大1989年度生187名について、アンケート調査（複数回答）を行い、その結果を考察した。

内容は下記の通りである。

(1) 被服構成を履修していましたか

YES ・ NO

(2) a. 履修した理由を答えて下さい

b. 前期履修して感じたことは

c. 後期履修して感じたことは

(3) a. 履修しなかった理由を答えて下さい

b. 履修者を見て何か感じましたか

(4) 小・中・高等学校の家庭科で何を製作しましたか

(5) 被服構成はどの様なことを学ぶ教科だと思いますか

(6) この教科について、意見があったら記入して下さい

## 3. 調査結果

被服構成を履修していた学生は84名（45%）履修しなかった学生は103名（55%）であった。

履修した理由は〈表-2〉で示した。

その他、小数意見として、「浴衣が欲しかったから」8%、「高校の被服構成の成績が良かったから」7%、「既製服より手作りの方が安上がり」4%、「器用だから」4%等の回答があった。この結果、縫うことに興味があり、それが、ある程度出来る自信のある学生が履修していることがわかる。また、被服製作というと今までは洋裁のイメージが強く、和裁は未知の世界で挑戦してみたいという意欲が感じられた。「将来、服飾関係の仕事をしたい」或は、「和服を縫える人が少なくなっているので学んでおきたい」等、将来を考えての履修者が沢山いるのではと思っていたが、そのような意見が無かったことが残念である。なかには、ごく小数意見であるが、「家政科に入学したのだから履修するのが当たり前」「不得意科目だから学んでみよう」と言う回答もあった。

前期履修して感じたことは〈表-3〉で示した。

表2 履修した理由

	％
1. 被服構成という授業に興味があった	55
2. 基本を学んでおけば自由に应用できると思った	45
3. 縫うことが好き	42
4. 基本をしっかりと学べると思った	39
5. 洋裁が好き	30
6. 自分で浴衣が縫いたかった	26
7. 洋服が好き	23
8. スカートの縫い方を理論的に学びたかった	23
9. 自分の体型に合うスカートが欲しかった	18
10. 教職必修だから	17
11. スカートが縫いたかった	17
12. ミシン縫いが好き	16
13. 和裁が好き	13
14. 手縫いが好き	11
15. 中学校・高等学校で学んだ事が深く追及できると思った	11
16. 既製の寸法直しが出来ると思った	10
17. その他	34
計 (M・T)	430

(N=84)

表3 前期履修して感じたことは

	％
1. 一人で浴衣を縫いあげたことに感激した	77
2. 時間が足りなかった	57
3. 楽しい授業だった	56
4. 知識が増えた	43
5. 宿題が多かった	41
6. 布幅の狭い一反の布から着物が構成されることに感心した	35
7. 着物に対する知識が増えた	32
8. 家族の評判が良かった	19
9. 和服に興味を持つようになった	13
10. 昔の人の生活の知恵に感心した	10
11. 難しく理解するのが大変だった	10
12. その他	16
計 (M・T)	409

(N=84)

その他、小数意見として、「ミシンで浴衣が縫えることを知った」8%、「浴衣以外の物を製作してみたかった」7%、等の回答があった。初めての和裁で、苦勞が多い反面、仕上がった時の喜びは大きかった事が感じられた。「つまらなかった」と答えた学生はいなかった。

表4 後期履修して感じたことは

	％
1. 自分の体型に合うスカートが仕上がって嬉しかった	49
2. 楽しい授業だった	46
3. 時間が足りなかった	45
4. 知識が増えた	33
5. 宿題が多かった	27
6. その他多くの物が縫いたかった 例：ワンピース	18
7. 洋裁に興味を持つようになった	12
8. その他	11
計 (M・T)	241

(N=84)

表5 履修しなかった理由

	％
1. 時間内に出来るか不安	53
2. 時間数の割に単位が少ない	50
3. 不器用だから	42
4. 和裁が嫌い	22
5. 被服構成という授業に興味がない	21
6. 洋裁が嫌い	19
7. 縫うことが嫌い	18
8. 手縫いが嫌い	15
9. スカートを縫いたくない	14
10. 中学校・高等学校で学んだので	13
11. スカートは以前縫っているのでもつまらない	12
12. ミシン縫いが嫌い	10
13. 浴衣を縫いたくない	10
14. 高等学校の被服の成績が良くなかった	10
15. 材料費がかかる	10
16. その他	26
計 (M・T)	345

(N=103)

後期履修して感じたことは〈表-4〉で示した。その他、小数意見として、「つまらなかった」5%、「難しく理解できなかった」4%、「アパレル関係に興味を持った」2%、等であった。前期と同じ様な感想だったが、前期に時間が足りずに宿題となることを経験していたので、それに比べると苦勞は少なかったようだ。小数ではあるが、「つまらなかった」と答えた学生がいたことは残念である。

履修しなかった理由は〈表-5〉で示した。

その他、小数意見として、「浴衣は以前、縫っ

ているので縫いたくない」8%、「浴衣、スカート以外の教材を製作したかった」6%、「体型を計測したくない」5%、「浴衣は持っているので作りたくない」2%、等があった。この結果、上位3つに回答が集中している事がわかる。また、小数意見からは、製作する教材によっては履修していたかもしれないという雰囲気が読み取れる。

履修者を見て何か感じたかは〈表-6〉で示した。

「時間外に行う作業が多くて大変そうだ」の回答が過半数をこえた。しかし、履修者が何をしようといふ余り興味が無いようである。

小・中・高等学校の家庭科で何を製作したかは〈表-7〉で示した。

小学校の記憶はだいぶ薄れていた。小・中学校は、文部省の定めた学習指導要領に添って決定し

ているので、似通った教材になっている。小学校は、布を用いた身の回りの簡単な物の製作、その他、手芸。中学校は、スモック（作業着の製作）、スカート（日常着の製作）、パジャマ（休養着の製作）と、3点は、ほとんどの学生が習得している。高等学校の場合は、小・中学校を土台とした教材に工夫がみられ、スカートにしても、中学校

表6 履修者を見て何か感じましたか %

1. 時間外に行う作業が多くて大変そうだ	56
2. 難しそう	19
3. 自分も履修すれば良かった	14
4. 何も感じない	14
5. 楽しそうで羨ましい	12
6. その他	7
計 (M・T)	122

(N=103)

表7 小・中・高等学校の家庭科で何かを製作したか

小学校	%	中学校	%	高等学校	%
エプロン	67	パジャマ	93	スカート (裏付き)	46
袋	21	スカート (裏無し)	93	編物	6
雑巾	11	スモック	65	浴衣	5
小物	10	エプロン	5	ワンピース	5
刺繍	3	編物	4	かっぽう着	5
スモック	2	ブラウス	4	ブラウス	4
小物入れ	2	小物	4	エプロン	3
		子供服	1	子供服	2
		ズボン、ベスト	1	刺繍	2
		白衣	1	ばっぴ	2
		ワンピース	1	小物	2
		Tシャツ	1	子供用浴衣	2
				ジョギングパンツ	2
				ズボン	1
				スーツ (裏付き)	1
				長襦袢	1
				刺子	1
				織物	1
				白衣	1
				ヨットパーカー	1
				パジャマ	1
				レース編み	1
				ベスト	1
計 (M・T)	116	計 (M・T)	273	計 (M・T)	96

(N=187)

では、タイトスカート（裏無し）であったが、高等学校では、型は自由・裏布を付けたスカートを製作している。そして、数多くの作品名が挙げられ、その中でも何名か大作を挙げていたが、高校3年次に被服を選択した学生と思われる。実際、その学生と、選択しない学生とは、短大スタートラインでは、理解力に差が現れることもある。また、一人の学生で、1年次、セーター製作、2年次、セーター・帽子製作、3年次、ツーピース製作と、編物だけと答えた学生もいたが、珍しいことである。また、男女共修を行っている学校と、行っていない学校で、差が出たということも考えられるが、今回は、その点に付いて尋ね無かったので、明らかにはならなかった。

被服構成はどのようなことを学ぶ科目かは〈表-8〉で示した。

表 8 どのようなことを学ぶ科目か %

1. 基本的な製作方法を理解すべき製作を行い、それを日常生活に役立てる	75
2. 手で作る楽しさ、喜び。作り上げた喜び、感動。最後までやりとげる努力	21
3. 季節感をふまえ、用途・目的に応じた布地、衣類の選択。布の種類による身体との適応性を知る	16
4. 和裁、洋裁の構成の違いを理解する	13
5. 体型を知る。体型にあった衣服作り	10
6. 基本的な製作方法を理解し、応用・発展させていく	9
7. 衣服が人間にとっていかに大切な役割をしているか	8
8. 一枚の布が衣服になる。平面から立体へ	5
9. その他	20
計 (M・T)	177

(N=187)

その他、小数意見として、「自分の好みに合った似合う服を自由に作れるようになる」、「型紙の製作」、「洋裁・和裁の技術を学ぶ」、「女性の繊細さを引き出す」、「服を作り上げることにより、服についての興味を深める」等であった。この質問では、ほとんどの学生が、「基本的な製作」を挙げており、「縫うことを学ぶ」とか、「補正を学

ぶ」とか、具体的に一つだけ挙げる学生もいた。また、私見を求めたのだが、実際自分が授業中に行った、印象に残っている部分を答えたのではと思われる回答もあった。

この教科については、ほとんど回答が共通していた為、文章にまとめる事ができた。「既製服が多く出廻り、簡単に入手できる今日、ボタンの付け直し、裾上げ程度が出来れば、服を作ることが出来なくても生活に困ることはなく、既製品をよく観察する知識、管理・保管能力の方が必要ではないか。ただし、将来子供の簡単な服や、手さげ袋など、小物を作ってあげる事によって、愛情が伝えられ、母と子の心の交流が持てる。しかし、そういった事を行うにも、小・中・高等学校の知識があれば、簡単に理解できる本があるので、長い時間をかけて、1つの作品を仕上げる必要性は無いのではないか。」という意見に集約できる。小数意見として、「短大では“作ってみる”その方法を学ぶ“体験”する絶好のチャンスと考えたい。特に和裁に関しては、作れなくても困らないが、“作ったことがある”という事に価値があると考えたい。」「家政科に入ったのだから履修して当然である。」と言いきった学生も居り、この3つは、学生の立場からの意見だが、どれも同感で、参考にはなるが、益々考えさせられる結果となった。

#### 4. 考 察

履修者の回答を考察すると、ここ数年、新たに日本の良さを見直そうと言う傾向が強まり、若者向けのファッション雑誌でも浴衣が取り上げられ、呉服店には、数年前の浴衣地に比べると、カラフルな色合いの反物が販売されている。学生達も、布地を購入するときには、色彩や模様、値段の豊富な中から、迷いながらも楽しんで選ぶことが出来たらしい。そして、初めての和裁で期待も大きく、浴衣のシーズンの7月に仕上げるということが、必ず着装出来るものにしたという意気込みにつながったと考えられる。だが、実習に入って

みると思うようには進まず、少しでも気に入らなければ、ほどいてやり直したり、和服に対する知識が無いに等しく、各部位の名称も知らない状態から始めたので、説明されたことを理解しないで進め、間違いを指摘されたり、苦労が多かったようだ。しかし、大作を作り上げた喜びは、自信にもつながり、日常生活とはかけ離れていた和服が、身近なものに感じられ、興味を持てたということである。その結果、後期のスカート製作だけでは、多少物足りなさを感じたようである。この理由として、前期は高価な反物を大切に扱い、作っていくうちに愛着がわき、仕上がったときの満足感は大変なもので、それに比べスカート製作は、中学・高等学校で行っており、その作品を着用しようにも、型や、布地が、流行の物とは違い、1回も着用しなかったという体験から、今回も、「着用しない、出来ない」と、はじめから安価な布地を用意し、そのため和裁の時とは反対に、仕上がりも手を抜きがちになり、感動も少なかったということである。楽しく製作できるようにと、スカートの型は自由であったが、ほとんどの学生がタイトスカートで、これは、自分だけ別の事をして目だちたくない、みんなと一緒に事をしていてと安心するという深層心理からであろう。

「時間が足りない」、「宿題が多い」「難しくて理解に苦しんだ」という回答もあったが、5、6年前に比べて、複雑な実習を行っているわけではない。以前と変わらず、小・中・高等学校で学んだ知識の上に積み上げてこそ大学教育であり、選ばれて、入学してきた学生に対して、復習を一緒に行う必要性はないはずで、自ら理解するよう努力していかなければならないのではないかと感じる。作業を丁寧にやらなければ気の済まない学生、多少雑でも要領よく進める学生、その辺の進度差は仕方がないが、理解力の差は、あってはならないと感じる。また、努力は惜しまないで欲しい。

履修しなかった学生の結果からは、「単位数が多ければ履修した」「その2限分に他の選択科目を履修すれば4単位数修得できる」、「単位数が少な

いの宿題が多く、時間を費やしても不器用だから上手に縫えず、良い成績がもらえない。それでは、履修して苦勞することはない」等で、事前にある程度大変だと予測される事は避けたいという意識があることがわかる。「単位数が多ければ履修した」という学生もいるが、単位数が増えたら良い結果になると思う。しかし、苦勞はしたくないのである。そして、「自分は不器用だから被服製作は出来ない、やりたくない」といい、手先を使う事から遠ざかっていく傾向があるが、手は使わなければ、益々鈍くなり、器用さを失うもので、たまに細かい作業を行おうと思っても、上手に出来ず、いらいらする。うまく出来なければ、やる気もなくなる。これでは、悪循環ではないか。手先を使うことは、脳細胞を刺激し、老化現象を防ぐ働きもある。そのような効果も考えながら、「不器用だから」と諦めないで、よりよい結果に近づくようにして欲しい。

小・中・高等学校で製作した作品の結果からは、このときの経験で被服製作が好きになるか嫌になるかわかるのではないかと思っただけではなく、その時の感想などの回答が無いと先にあげたことを推測するのは難しいことがわかった。

この教科についての意見からは、「既製服が多く出廻り、簡単に入手できる今日(中略)長い時間をかけて、一つの作品を仕上げる必要性が無いのではないか。」という意見に対して、一つの作品を作り上げるときには、忍耐力、精神力、細かな神経、持続力等を必要とし、これは仕上げて初めてわかり、気づくことである。特に和裁に関しては、学ぶ機会も、縫える人も少なく、経験者は貴重な存在である。第二次世界大戦後は、文化や文明は以前にも増し、欧米の影響を受け、世界の先進国に追い付こうとしていたが、日本経済が豊かになり高度成長を遂げた今日、日本人は日本の良さを顧みる余裕が出来たので、和服の価値、和裁の知識、経験や、その他、歴史的な庶民の手による被服文化の継承・発展を見直して、後世に伝

えていく為にも、学んでおくことは必要だと思う。そして、既製服が多く出廻るなか、子供達に手作りの良さと愛情を伝えていき、親子の愛情の交流としても、無くしてはならないと考えたい。

## 5. 調査まとめ

布地選択によって作品の優劣が決まってしまうことから、布地選びの重要性を確認すると共に、材料購入時の知識を充分に与えることが必要であり、教材を決定するには、現在の流行を取り入れながら、仕上がった作品を学生達が活用できることが大切であるといえる。

また、一部の学生を除く、ほとんどの学生は、自分から考えて行動する事が少なくなり、言われたことだけを行い、苦勞することを避ける傾向が強くなってきたように思われる。

## 6. 今後の被服構成について

古代から、衣料の生産（麻や綿の生産、養蚕）や加工（糸取り、紡ぎ、機織）から、裁縫、衣服の手入れ・保管・再生等、衣料や衣服の全生産過程は、女性の労働によって支えられてきた。母親の仕事を見て育った子どもは、ある程度の技術は自然に身に付く。こうした労働能力・技術を身につける教育は、当時、一人前の女性になる為には、欠かせないことであった。資本主義の伸展に伴って、衣料生産が家庭から企業に移っても、家族が使用する被服は、寝具に至るまで、主婦の責任とされており、裁縫技能の修得は、家庭生活を営む上で、欠かせない条件の一つであり、それに伴い、主婦に要求される裁縫技能は、過重ではあったが、裁縫の技術が優れていれば、家族の生活を支えることも可能な時代もあった。これが、戦後の繊維産業の急成長、被服の商品化、大量生産・大量消費の商業戦略により、衣生活の洋風化、ファッション一辺倒の意識革命が進み、今や、被服に関する労働は、洗濯の一部を除いて、家庭から全面的に企業の手に移ろうとする状況である。こうした現状の中で、家政科における裁縫教育、そして、

その大切さを良く理解した上で、今後の被服構成の授業を、希望的観点から考えてみた。現在は選択科目として大学・短大に設けているところがほとんどで、中学校・高等学校にしても、縫う習慣というものがなくなり、見たことが無い現状で、被服製作よりも管理・選択眼を養うべきだという意見も多く聞かれる。被服製作の重要性が薄れているのは確かである。だが、家政科の始めは裁縫教育からではなかったか。歴史をたどっていけば、被服構成、被服製作の授業は無くなってはならないはずである。ただし、今までの裁縫教育ではなく、もっと現代的に考えてみる必要があるのではないかと思う。服飾メーカー並びに企業に対する人材育成などと言う点を重視してはどうだろう。企業では、デザイン・パターンメイキング・縫製と、どれをとっても専門家の分野である。だからといってそのみの教育を受けてきた人間だけが求められているのではなく、専門教育を受けてきた者も3年間は、教育期間で終わるというのである。そうすると、短大卒の人は、広い視野で物事を考え、また、専門的な技術も理解し、基礎が出来て应用能力が身につけているので企業から望まれる人材ではないかと思う。そういった立派な職業婦人になるよう意識を高めていくことも必要ではないか。

さらに、既製服業界では、ここ数年、CADソフトの開発が進み、コンピューターによる作業が多くなり、人員削減、工学的なことに男性の力が必要と言われているが、まだまだ素材の持っている条件をパターンに展開する等という感性による微妙なニュアンスをコンピューター化するのは難しく、人間の力を必要とするので、特にそういった点では女性の能力は大切なものだと思う。女性にとって、「おしゃれをする」「きれいに装う」と言うことは、年齢に関係なく興味があり、永遠のテーマでもある。その際、同性の目、意見、評価は厳しく、重要で、それが作りだし、支持する物は、やはり、受け入れ易いはずである。そういった点からも、被服・服飾は、社会で最も女性

の能力を発揮し易い分野なのではないだろうか。女性はこのような分野を学び、関わることによって、適性に気付くかも知れない。衣生活・食生活・住生活の分野の中で食・住生活は、日常生活を行っていく上で、その必要性、または適性を知ることができる。服を着ているだけではその事には気付か無いことが多く、学んで、製作してみても初めてわかることである。だから、小・中・高等学校までは、家庭や生活にすぐ結び付くための被服構成・被服製作の授業であったので、それらをふまえながら、この時間は、専門分野のより高度な技術と、服飾・流行などを理解しやすく教え、興味を持つ為の時間と考えてみてはどうだろうか。

被服は人間が社会生活を送る上で必要な物である事はだれしも常識として弁えているであろうが、被服構成という科目が、「おしゃれ」「ファッション」「流行」にも重点を置いた魅力的な教科で在ることを学生達に認識させるよう努力し、勉強していきたい。

## 参考文献

- 1) 奥平志づ江；家政学と家庭，家政研究，19，1988
- 2) 横川公子；衣服づくりの技術をめぐって，衣生活研究，12，20～23，1990
- 3) 梶山藤子他；大学・短大における被服教育のこれから（上）（下），衣生活研究，4，5，1991
- 4) 家庭科教育研究者連盟編；家庭科研究，あゆみ出版，1989～1991
- 5) 家庭科教育研究者連盟編；楽しくわかる中学校家庭科の授業，あゆみ出版，1988
- 6) 家庭科教育研究者連盟編；楽しくわかる高校家庭科の授業，あゆみ出版，1987